



# 対話

10月15日

Sudden Fiction Project

高階經啓  
hirotakashina

## 10月15日のおはなし「対話」

---

「手放すことだ」と、年老いたその生き物は言った。「わたしもいま手放すところだ」  
「死んでしまうのですか」と飼育係の若者は尋ねる。「今晚、死んでしまうのですか」  
「お前たちの言葉を借りれば」と1世紀半も生きた生物はゆっくりと頭をもたげると若者を見つめる。「そういうことになる。死ぬ。今晚。しかし」  
そこで言葉を途切れさせたままびくりとも動かなくなる。  
「どうしました？」若者はびくりする。死んでしまったんだろうか。まさか。こんな中途半端なところで？ あわてて駆け寄ると鼻孔の前に手をかざす。「どうしました？ まだでしょう？ まさか、まだ死にませんよね」

けれどゾウガメは首をもたげ、飼育係を見つめた姿勢のまま、もはや息をしていなかった。そのときになって若者はやっと、世の中はドラマのようににはできていない、死ぬときはあっけなく死ぬし、話している内容が途中だろうが何だろうが、中途半端だろうがオチがなかろうが、もうそれ以上何も出てこないと言うことがあるのだと悟る。ゾウガメの死を園に報告することよりも、若者にとってはその悟りの方が大きくて、大きすぎて茫然としてしまう。

しばらくして飼育係は自分がゾウガメ舎の掃除をしていることに気づく。床をブラシで磨き、ガラス面を磨き上げ、エサ箱の中の古いものを捨て、新しいエサに入れ替え、ゾウガメがひなたぼっこをする時のための寝藁をあちこちにしつらえている。ゾウガメの大きな亀裂だらけの甲羅を磨こうとして初めて若者は我に返る。年老いた生き物はもうエサを食べることもないし、ひなたぼっこをすることもない。ゾウガメは死んでしまったのだ。手放すことについて何かを語ろうとしていた。それが何なのかはわからない。でもひとつだけ確かなことがある。若者はゾウガメと過ごす貴重な時間を永遠に手放してしまったのだ。

はらはらと涙が流れ、作業着の胸元を濡らす。ずいぶんたってから若者は自分が泣いていることに気づく。しゃくり上げるでもなく、嗚咽を漏らすでもなく、ただ涙だけが驚くほどたくさん頬を伝って落ちる。「あー」とも「おー」ともつかぬロングトーンの低い声を出しているのに気づいたのもそのときだ。なんて泣き方をしているんだ、おれは。泣きながらおかしくなって笑ってしまいそうにも思う。

「何を泣いているんだ」  
そう聞かれて若者は答える。  
「ゾウガメが死んでしまったんです」沈黙が訪れる。そして若者は気づく。「誰？」  
と若者が口にするのと同時にその声が語りかける。  
「ゾウガメというのはわたしのことか」  
「死んでなかったんですか？」  
「むう」ゾウガメはゆっくりと首を振りながら返事をする。「死んでなかったようだ。悪いんだけど」

ゾウガメとの哲学的な対話はまだ始まったばかりである。

(「手放す」 ordered by オネエ-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

## 感謝の言葉と、お願い&お誘い

---

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブックログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただけると大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできるのですが、面と向かって星をつけるのはひよっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

## 対話

<http://p.booklog.jp/book/35133>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/35133>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/35133>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社paperboy&co.